

41842

教科書文庫

4
815
41-1912
20000
14582

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

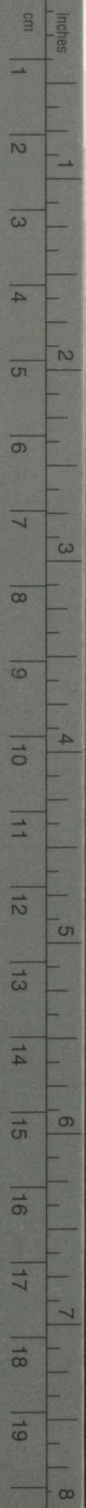


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Mi20
資料室

中等文法教本

下



資料室

廣島大學
圖書部

375.9
Mi20

明治四十五年一月廿九日
文部省
中等學校國語科用

三矢重松
清水平一郎
合著

中等文法教本

東京 明治書院



中等文法教本下

目次

第一章	名詞代名詞の格	一
第二章	テニヲハの各説	六
	一 名詞代名詞に添ふもの 練習	一
	二 種々の詞に添ふもの 練習	一
	三 動詞形容詞等に添ふもの 練習	一七
	四 感動を表すもの 練習	二二
第三章	接頭語 接尾語	二四
	一 接頭語	二四
	二 接尾語	二五
第四章	文	二七

目次

一	文の成分	二九
二	成分の位置	三六
三	成分の並置	三八
四	成分の倒置	四〇
五	成分の省略 練習	四一
第五章	句	四六
	形容句 副詞句 主句 客句 叙述句 中止句 練習	
第六章	小句	五五
	形容小句 主小句 客小句 副詞小句	
第七章	文の組織	五九
	單文 複文 重文 練習	
第八章	文體及文の結	七二
	平敘體 疑問體 命令體 感動體 練習	
第九章	敬語	七九
	尊他 自卑 對話 練習	

第十章	中古の助辭	
	過去完了 未來完了	八四
	希望 なむ もが しが	八七
	恚像 らむ らし めり まし	八八

附 録

文法上許容すべき事項

(目次終)

中等文法教本 下



三 矢 重 松
清 水 平 一 郎
合 著

第一章 名詞代名詞の格

名詞代名詞の文中に在りて他の詞に對する位を格といふ。

○主格

風 吹く。 花 美し。 我は 男なり。
右の 風 花 我は、動作状態等の主たるものにて、之を主格といふ。

○定限格

櫻の 花 咲けり。 わが 家は 狭し。

右の櫻わは、他の名詞の意義を定限したるものにて、之を定限格(領格)といふ。

左の文中に於ける名詞・代名詞の主格・定限格を擧げよ。

余は 梅の 香を 愛す。

余が 家は 東京の 麴町に 在り。

先生 余に 學課の 復習を 命ぜられたり。

君も 嘗 京都の 嵐山に 遊びしか。

人の 己を 知らざるを 患へず。

○賓格

犬 猫を かむ。

右の猫は動作の目的たるものにて、之を賓格(目的格)といふ。

鳥 空を 飛ぶ。

右の空は、動作の場處を示したるものなり。之をも賓格(副格)といふ。

○右の外、動詞又は形容詞の意義を完成する爲に、場處方向標準等を示すものは、賓格(副格)と心得べし。

吾は 學校に 行く。

猫 犬に 噛まれたり。

其の 形 富士山に 似たり。

大佛は 南へ 向きたり。

友 遠方より 來たり。

露兵も 清兵より 強し。

彼は 東京まで 行けり。

余は 汝と 遊ばむ。

桑田 變じて 海と なる。

○呼格

諸君 靜に 聽き給へ。

右の 諸君 は、呼びかけたるものなり。之を呼格といふ。

○同格

余は 日本人なり。

我等 日本人は 皆 大和魂を 有す。

右の 日本人 我等は、他の名詞と同じ物を指したるものなり。之を同格といふ。

左の文中の名詞代名詞に就き、各種の格を擧げよ。

人は 萬物の 靈なり。

活潑なる 精神は 健康なる 身體に 宿る、

てふく てふく 菜の 葉に とまれ。

將軍 兵を 遼東に 進む。

吾等 父兄は 常に 其の 子弟の 健康と 學

術の 進歩とを 祈れり。

義經は 義朝の 子にして 頼朝の 弟なり。

日や 月は 正直なる 頭を 照すべし。

第二章 テニヲハの各説

一 名詞代名詞に添ふもの

テニヲハの各説
名詞代名詞
種々の品詞
動詞形容詞

のが
主格
持格
私の家
彼が父

を
目的格
賓格
巡査
賊を捕

捕
たことありき
沐浴語
北行
空を飛ぶ

○がの

右の が の は、主格に添ひて語調を婉曲にするものなり。
櫻の が 花が 咲く。 我が 家は 狭し。
右の の が は、定限格に添ひて、他の名詞に接續せしむるものなり。

○を

犬 猫を かむ。
右の を は、賓格に添ひ、動作の目的を示すものなるが、又場處を示すことあり。
鳥 空を 飛ぶ。 舟 河流を 下る。

○に

吾も 學校に 行く。 子 父に 似たり。
右の に は、賓格に添ひて位置標準を示すものなり。

○へ

大佛は 南へ 向きたり。
右の へ は、賓格に添ひて方向を示すものなり。
に と へ とは、區別して用ゐざるべからず。

汽車に 乗るとて かなたへ 行きたり。

馬に 乗らむと 思ふ 者は 左へ 行け。

東へ 行く 人は こゝに 居れ。 西へ 行く 人

は 向へ 渡れ。

○より、かう

友人 東京より 歸りぬ。

自從東京歸

に
位置標準
學校は
廣島
あり
猿は
人に
似たり

へ
方向

より
出發
是れ
比較

右のよりは、賓格に添ひて動作の起點を示すものなり。
又比較を示すにも用ゐらる。

彼は 我より 賢し。

彼於我賢
自從於前置詞

まへに

○まで

余も 東京まで 行く。

右のまでは、賓格に添ひて動作の止る處を示すものなり。

○と

吾は 君と 遊ばむ。

桑田 變じて 海と なる

右のとは、賓格に添ひて動作の目的を示すものなり。

孟子は 性は 善なり」と いへり。

「これこそ よけれ」と 仰せられけり。

「善は 急げ」と いふ 諺 あり。

「待て しばし」と 呼ぶ。

右は文句を賓格としてとが添ひたるなり。かゝる場合には、とは意味のまとまりたる處に添ふべきものなり。左の誤を正せ。

「己を 損して 人を 益する」と いふ 教を 守る。

「昨日も 勉強せると」 いふ。

「あすこそ 行かむ」と 誓へり。

「これは 善き」と いはずして 「彼は 悪しからぬ」と やうに いひ定む。

○とは又名詞を並ぶる時に用ゐらる。

兄と 弟とが 行く。

兄と弟とが

五と 三との 和は 八なり。

梅と 櫻とを 植ゑたり。

名詞を並ぶる時に、下の名詞にとを添へざることあり。

梅と 櫻と 山と 川と

されど其の爲に、意味に不明を生ずることあれば、注意せざるべからず。

弟と 兄の 子を 招けり。

近衛師團と 第六師團の 一箇大隊が 先鋒たり。

〔練習〕

左の文につき、名詞代名詞の格、及既習のテニヲハを説明せよ。

例 英と 露とが 歐洲の 強國なり。

英 名詞、主格 と 並ぶるテニヲハ

露 名詞、主格 と 並ぶるテニヲハ

が テニハ、主格附屬 歐洲 名詞、定限格

の テニハ、定限格附屬 強國 名詞、同格

一 余が 友は 英語を 米國の 婦人に 習へり。

二 生徒の 足袋を はく ことを 禁ずる 學校 あり。

三 父は 筆と 紙とを 余にも 弟にも 賜へり。

四 余は 東京より 京都に 京都より 大阪へ 旅行を 續けた

五 宿所を 宛名より 大きく かけ。

六 清國は 東洋の 大國にして、且 世界の 古國なり。

七 天下の 人士 始めて わが 軍の 世界に 超絶せる ことを 知りぬ。

二 種々の詞に添ふもの

○は も

花は 美し。 花も 美し。

彼には逢ひたり。彼にも逢ひたり。
楽しくはなかりき。楽しくもなかりき。
右のはは、取り立て、別つ意にて、もは併せ並ぶる意なり。

はは又「不義をばせじ」など、濁音となることあり。

○ぞなん

花ぞ 美しき。 花なん 美しき。

彼にぞ 逢ひたる。 彼になん 逢ひたる。

楽しくぞ 思ふ。 楽しくなん 思ふ。

右のぞなんは、一を取り挙げたる意なり。ぞなんの係る語は第四段にて終止すること、既にいひたるが如し。

○こそ

花こそ 美しけれ。 彼にこそ 逢ひたれ。

楽しくこそ 思へ。

右のこそは、ぞの一層重き意なり。こそに係る語は第五段にて終止すること、既にいひたるが如し。

○やか

花や 美しき。 彼にや 逢ひたる。

楽しくや 思へる。 樂しとや 思ふ。

誰か いふ。 何をか 取る。

右のやかは疑ふ意なり。やかの係る語は第四段にて終止すること、既にいへるが如し。

○やか が動詞・形容詞又は助動辭に添ひて文を結ぶ時は
やは第三段に、かは第四段に添ふ。

咲くや

咲くか

捨つや

捨つるか

賢しや

賢きか

人なりや

人なるか

賞せずや

賞せざるか

降りきや

降りしか

○ク・シク活の第二段にやの添ひて、終止せる文あり。

いかゞ 之あるべく(候フ)や

是にて 宜しく(候フ)や

さては あまり 煩はしく(アラム)や

御立寄下さるまじく(候フ)や

此等は皆中間に動詞を含めるものなり。

○代名詞の不定稱にはやを添へず。次の如き場合は、かと言ふべし。

誰をや 尋ぬる。 何處にや 行きたる。

○やか の疑問の中に、否定の意を含むものあり。之を反語といふ。

吾 豈 金錢を 惜まむや。

何時までも かくてやは あるべき。

いかでか 行かむ。

月 花のみ 見るべき ものかは。

〔練習〕

左の文に誤あらば正せ。

- 一 君は 花見に 行かざるか。

- 二 けふこそは 花見に 行かむゆ
- 三 これが 水と なるか。
- 四 君は 軍人と なるや。
- 五 これは 信なりや 否や。
- 六 此を 取らむや 彼を 取らむか。
- 七 君は 何を 愛するや。
- 八 何處にや 置きつる。
- 九 君は 行かずか。
- 一〇 何を 植うるか。
- 一一 飢へりる こと なきや。
- 一二 花 咲きたるりやと 尋ねたるか。
- 一三 悪しきやか よきや 知る 人 なし。
- 一四 御出下されまじしや。
- 一五 思ひきや 雪 ふみわけて 君を 見むとは

三 動詞・形容詞等に添ふもの

○ば

咲かば 美しくば 行かずば 咲きなば
 美しからむ 植ゑむ 見ゆまじ 賑ならむ
 咲けば 美しければ 行かねば 咲きぬれば
 美し 植う 見えぬ 賑なり
 右のばは、第一段又は第五段に添ひて順態の假定又は確定前提法をなすものなり。

○とも

晴るとも 美しくとも
 行くまじ 植うまじ
 咲きぬとも 見るまじ
 右のともは、動詞の第三段、形容詞の第二段に添ひて、逆態の假定前提法をなすものなり。

○ども ど

咲けども 美しからず。 美しけれど 咲かず。
行かねども 見ゆ。

右の ども どは、第五段に添ひて、逆態の確定前提法をなすものなり。

○を に も が

色は 匂へど 散りぬるを 我が 世 誰ぞ 常ならむ。

日は 暮れかゝるに 宿るべき 家 なし。

かく 寒きに 羽織だに 著ず。

矢は 當らざりしも 痛手は 負ひぬ。

雨は 降るが 風は 吹かず。

昨日まで 暖なりしが 今日はいと 寒し。

右は第四段に添ひて、一種の逆態前提法の意を表す。

もは又「價安くも買はじ」など、ク活シク活の第二段に添ふことあり。

○て して

學びて 習ふ。

柔くて 甘し。

寝ねずして 讀む。

小さくて 強し。

静にして 寂し。

見ずして 歸る。

右は第二段に添ひて連用法を助け、「サウシテ」の意を表すも

のなり。 (藤原の浦の打をて見れば直の白は子) 行根を雲よりける

○つゝ 田子の浦打ちをて見れば白多の 富土のなる根も學はありや

我等は 今 文法を 學びつゝ、 あり。 學はありや
行きつゝ、 見る。 見つゝ、 行く。

右は動詞の第二段に添ひ、進行反覆の意を表すものなり。

〔練習〕

左の文に誤あらば正せ。

- 一 若 雨 降れば 行かれまじ。
- 二 假令 天 寒ければども 行かむ。
- 三 見ざるとも 口惜しくは 思はまじ。
- 四 假令 花は 咲きぬれども 見る 人 なからむ。
- 五 學びて 時に 之を 習ふ。
- 六 けふ 行かざれば 花も 散り過ぐるべし。
- 七 晴れたるとも 行かまじ。

八 友を 訪ふて 逢はざるぞ 遺憾なれ。

四 感動を表すもの

○や

行けや 君。

難波津に 咲くや この 花。 (今春も咲くや此花 至仁の詠)

心あらむ 人に 見せばや。

瓢や 瓢や 吾 汝を 愛す。

今や 天下 太平なり。

○は も

何かは せむ。 我のみ 降らむやは。

すは 奴めを 手延にして たばかられぬるは。

いともし かしこし。 必しも 然らず。

○な 蚤の を舟の 綱手 かなしも。

いとも 悲しな。

○花の 色は 移りにけりな。

○よ

鳴けよ 鶯 君よ 待て。

弘安の 頃とかよ。

○かな

楽しいかな 今日の 遊。

○彼も 亦 人傑 なるかな。

○かし

思へかし。 見よかし。 讀みねかし。

世は さやうの 習ぞかし。

○をや

いはんや 人に 於いてをや。

かゝるべしと 兼ねては 思ひ寄らざりしをや。

〔練習〕

左の文中のテニヲハを説明せよ。

- 一 人が行く。君が代。習ひしが忘れたり。
- 二 雨の降る。櫻の花。
- 三 山に登る。呼びたりしに來らざりき。
- 四 君子といふべし。月と花とを賞す。
- 五 花をば見る。降れば行かず。
- 六 我も行く。いとも畏し。尋ぬるも無し。
- 七 春やくる。行けや君。
- 八 視るとも見えじ。彼の人も遊ばむ。

九 早く 起きよ、「蝶よ 花よ」と 愛育す。
一〇 學校より 歸る。 吾より 賢し。

第三章 接頭語 接尾語

單獨に用ゐず、他の詞の頭尾に接して一つの品詞を成す者あり。之を接頭語、接尾語といふ。

一 接頭語

小川 御代 御名 御先祖 眞心 生絲 素顔 花(女の名)

右は意義の慥なるものなり。

さ夜 さ迷ふ み笠山 み岬 い座す いち著し
た靡く た易し

右は殆ど意義なきものなり。

打ち語ふ。 立ち別る。 取り亂す。 差し支ふ。
搔き曇る。 もてはやす。 相願ふ。

などは、もと動詞なれども、其の意義微小にして、接頭語に準ずべきものなり。

二 接尾語

吾等 小兒ども 筆墨など 生徒たち 君がた

右は名詞・代名詞の複数を表すものなり。

太郎様 次郎君 大尉殿

右は、もと名詞なれども、今は敬意を表す接尾語として用ゐらる。

彼の 顔は 悲しげも なし。

嬉しさ いはむ かた なし。
深さ 三尺。

右は形容詞の語根につきて、名詞を造るものなり。

稍 春めきたり。

誰も 嬉しがりき。

皆の 面白がる 事を 話せ。

高ぶれば 却つて 卑めらる。

少年にして 大人ぶる 者 あり。

右は他語を動詞に形造るものなり。

彼は 女らしき 男なり。

某は 尙 兒供らしく 見ゆ。

右は他語を形容詞に形造るものなり。

此等の外、左の如きも亦接尾語にして、副詞を造る者なり。

門ごとに 立つ。 一人づゝ 見よ。

これほど 讀めり。 書きながら 讀む。

第四章 文

鳥 鳴く。

花 美し。

正成は 忠臣なり。

右の如く、語を連ねて完結したる思想を表したるものを、文といふ。文を論ずる時は、品詞又は品詞と助辭とを合せたる者を語といふ。

右の文に於いて、鳥 花 正成 は敘述せらるゝ語なり。

此等を主語といふ。鳴く、美し、忠臣なりは敘述する語なり。此等を敘述語といふ。文は主語と敘述語とを備へざるべからず。

吾 山に 登る。
猫 鼠を 捕ふ。

右の山鼠は、敘述語の意義を完成する語なり。此等を客語といふ。文は主語、敘述語の外に客語を要することあり。

かの 人は 外國の 語にも よく 達したり。
よき 犬は 主人の 恩を 長く 記憶す。

右のかの外國のよくよき主人の長く等は、他の語の意味を定限する語なり。此等を修飾語といふ。文は主語、敘述語、客語の外、修飾語をも備ふることあり。尙左に其の

例を示さむ。

兒供 眠る。
雪 白し。
霜 天に 満つ。
吾が 家は 甚 狭し。
われ 友人の 家を 訪ひたり。
愛らしき 小兒 蝶々を 追へり。
これは 美しき 本なり。
大久保利通は 維新の 功臣なり。

一 文の成分

文は主語と敘述語とのみにても組織せらるれども、更に客語を要し修飾語を備ふることあり。此等を文の成分とい

ふ。
○主語

花 さく。

日本 米と 戦はじ。

誰か いふ。

これも よし。

右は名詞・代名詞が主語に用ゐられたるなり。

散るぞ 惜しき。

はたらくこそ よけれ。

悪しきは 捨てらる。

善良なるは 用ゐらる。

右は動詞・形容詞の連體法が名詞として主語に用ゐられた

るなり。

○敘述語

花 さく。

鳥 餌を 求む。

彼は よく 勉強せり。

花 美し。

彼は 善良なり。

月 皎々たり。

右は動詞・形容詞が敘述語に用ゐられたるなり。

吾は 日本人なり。

勉強は 幸福の 基。

余が 友人は 彼なり。

彼は 誰ぞ。

右は名詞・代名詞が敘述語に用ゐられたるなり。

○客語 客語に用ゐらるゝ詞は主語に同じ。

吾 花を 愛す。

彈丸 こゝに あたれり。

余は 遊ぶを 好まず。

誰も 多きを 求む。

名詞・代名詞等が客語となるには、賓格に添ふテニナハを
にへよりまでと等を添ふ。其の之なきは、省かれた
る場合なり。

○修飾語

流るゝ 水ぞ すゞしき。

咲きたる 花 多し。

勉強する 人は たのもし。

美しき 花 さく。

靜なる 山里ぞ 戀しき。

君よ かの 皎々たる 明月を 看よ

右は動詞・形容詞の連體法が修飾語に用ゐられたるなり。

日本の 人は 忠孝の 心に 富む。

吾が 家は かの 山中に あり。

米國人 某 來朝せり。

内務卿 大久保公 刺客 島田の 毒刃に 斃れ給

ひき。

右は名詞・代名詞の定限格が修飾語に用ゐられたるなり。

以上は名詞・代名詞に係る修飾語の例なり。

我も 必 行かむ。

花 いと 美し。

謹みて 新年を 賀し奉り候。

君よ 急いで 行き給へ。

兒供が なくく 學校より 歸れり。

花 美しく 咲きたり。

舟 靜に 河を 下れり。

河水 滔々と 流る。

右は動詞・形容詞の連用法及副詞が修飾語に用ゐられたるなり。

以上は動詞・形容詞に係る修飾語の例なり。

○枕詞 修飾語の一種に枕詞といふものあり。音調を調へ詞を飾る爲に用ゐらる。これには一定の慣例あり。

敷島の…… 大和、日本心。

ぬば玉の…… ゆふべ、夜、黒、黒き。

梓弓…… 春、張る、射る、引く、本、末。

茜さす…… 日、晝、照る、紫。

吳竹の…… よ、ふし。

ちはやぶる…… 神。

あしびきの…… 山。

二 成分の位置

成分の位置には順序あり。

主語	子供が 子供が 子供が 子供が
客語	庭に 紙馬を 馬を 紙馬を
客語	遊べり 遊べり 描けり 描けり
敘述語	

右の如く、主語は首位に、敘述語は末位に、客語は敘述語の前に在り。また修飾語は修飾せらるゝ語の前に在るべきものなり。

修	主	修	客	修	客	修	敘
愛らしき	子供が	……	……	……	……	今	遊べり

隣の	子供の	……	……	……	……	……	……
あの	子供が	……	庭に	……	馬を	……	遊べり
賢き	子供が	白き	紙に	……	馬を	奇麗に	描けり

〔練習〕

左の文に付き、主語・敘述語・客語・修飾語をあげよ。

- 一 我が國は神國なり。
- 二 日本人は櫻を愛す。
- 三 天長節は十一月の三日なり。
- 四 花の色もはや移りぬ。
- 五 呐喊の聲 山岳にふるふ。
- 六 忠臣は孝子の門より出づ。
- 七 豊太閤も亦世界の英雄なり。
- 八 余は君が家をけさ訪ひたり。
- 九 吾 東京より今 歸れり。

一〇 國語の盛衰は 國家の盛衰に 關す。

三 成分の並置

成分は二つ以上並べ置かるゝことあり。

櫻^主も 梅^主も 美^し。

英^主 佛^主 露^主 獨^主は 西洋の 強國なり。

櫻^主や 桃^主や 梨^主など 咲きたり。

右は二つ以上の主語が一つの語にて敘述せられたるなり。

柿^は 美^{しく} 且 甘^し。

彼^は 勉^{強し} 又 運^{動す}。

西洋の 強國は 英^佛 露^獨なり。

右は二つ以上の語が一つの主語を敘述したるなり。

彼^は 筆^と 紙^とを もてり。

德 禽^客 獸^客 虫^客 魚^客に 及ぶ。

彼^は 柿^と 梨^とを 郷^里より 東^京まで 持^ち行^けり。

右は二つ以上の客語が一つの敘述語の意味を完成したるなり。

美^{しく} 且 甘^き くだものは 柿^{なり}。

密^柑も 美^{しく} 且 甘^き 菓^實なり。

戀^{しき} 我^が 母^は 郷^里に い^{ませ}り。

君^よ 今^今 漸^く 出^來たり。

答^案 明^日も 必^必 來^給へ。

右は二つ以上の修飾語が他の語を修飾したるなり。

四 成分の倒置

成分の位置には順序あれども、誤を生ぜざる限に於いて、之を顛倒することを得。

偏 ^三 に	君 ^二 を	吾 ^一 は	ま ^四 つ。
や ^三 よ	ま ^四 て	し ^三 ばし	わ ^一 が
知 ^四 らず	や	君 ^一 は	こ ^二 の
鶯 ^一 鳴	き ^四 ぬ	あ ^二 の	枝 ^三 に。
春 ^一 は	き ^四 に	け ^一 り	野 ^二 に
さ ^三 や	け ^一 かり	け ^一 り	夜 ^一 半
美 ^三 なる	哉	山 ^一 河	の
こ ^二 ゝ	に	人 ^一	あ ^三 り。
美 ^三 なる	哉	山 ^一 河	の
		固 ^二 。	
		夜 ^一 半	の
		月 ^二 。	
		山 ^三 に。	
		花 ^三 を。	
		友 ^二 よ。	

五 成分の省略

成分は省略せらるゝことあり。

時下 (貴君) 御障も あらせられず候や。

(主上) 八幡に 行幸あり。

麓に 一つの 庵 あり。(庵) 即 山守が 居る

所なり。

かしこに 小童 あり。(其ノ小童) 時々 來り訪ふ。

秋は ひぐらしの 聲 耳に 滿てり。(ソノ聲) 空

蟬の 世を 哀むかと 聞ゆ。

義經 蝦夷に 遁れたりと (人) いふ。

右は主語を省きたるなり。

希はくは 大方の 君子 賛成あらむ ことを(希ふ)。

おのれ 今日の日 式を祝ひて かくなん (イフ・申ス)。

ノブ

某伯 一時は 米鹽にも 窮せし こと ありとぞ
(イフ)。

いましらは 誰をか 最 慕ふと 問へば、 父母を
こそ (最慕へ)と 答へたり。

鶯の 「宿は (イツユ)と問はゞ いかゞ 答へむ。
君が 代は 千代に 八千代に さゞれ石の いは
ほと なりて 苔の むすまで (マシマセ)。

どうぞ こちらへ (入ラッシャイマセ)。

右は敘述語の省かれたるなり。

君よ 今宵ばかりは (コ、ニ) 宿り給へ。
多く 財を 有する 人は (財ヲ) 散ずることよ

けれ。

鹽屋の あるじの 歸りて候ふ。 宿を (アルジニ)
借らばやと 思ひ候ふ。

義朝 この 體を 見て はたと (信賴ヲ) 睨み
云々。

信賴 馬に 乗りかね給ふ 處を 侍 二人 つと
寄つて 疾く 召し候へとて (信賴ヲ) (馬ニ) 押し
あげたり。

梶原 (佐々木ニ) たばかられぬとや 思ひけむ 續
いて (馬ヲ) (宇治川ニ) 打ち入れけり。
まあ (御茶ヲ) 一服 御上りなさい。

右は客語を省きたるなり。

其は 誠に (好き) 都合なり。

(今日は) (天氣) ^主 お寒うございます。

仍つて (前ノ) 件の 如し。

相手も (イカマシキ) 相手なれど、此方も 不注意
なり。

秋も (最中ノ) 秋 今宵も (晴レタル) こよひ 月
も (十五夜ノ) 月 處も (賀陽院ト云フ) (好き) 處
見る 君も (前關白ナル) 君。

右は修飾語を省きたるなり。

〔練習〕

左の文の成分をいへ。

- 一 太閤は 尾張の 百姓の 子なり。

- 二 菅公は 筑紫に 流されたり。
- 三 恩賜の 御衣 尙 此に あり。
- 四 磯邊に 一本の 松 あり。
- 五 野分の 風ぞ 身には しむ。
- 六 余が 兄上は 余に 冷き 水を 汲ませ給へり。
- 七 牡丹は 櫻に 劣れり。
- 八 雲の 何處に 月 宿るらむ。
- 九 夜半の 鐘の 音は 客の 船にや 通ふらむ。
- 一〇 雄大なる 萬葉時代の 長歌は 遂に 發達せざりき。
- 一一 ふれ ふれ こ雪。
- 一二 少年は 烟草をも 酒をも 飲むべからず。
- 一三 予と 君とは 親友なり。
- 一四 誰と 共に 今宵の 月を 賞せむ。
- 一五 驕る 平家は 久しからず。
- 一六 此處に 塵を 捨つべからず。
- 一七 尙 袖 ぬらす 松の 下露。

- 一八 平安朝の 歌人は 多く 花鳥風月を 吟詠せり。
- 一九 我が 國の 醫者と 軍人とは 世界に 聞えたり。
- 二〇 本日 外務大臣 英國大使等 御陪食 仰付けられたり。
- 二一 昨日 高等學校の 入學を 許可せられたる 人々の 姓名 官報に 公示せられたり。
- 二二 父は 兄をして 弟に 讀本 及 算術を 教へさせたり。
- 二三 吾 未 一度も 嶮しくして 且 高さ 山岳に 登らず。
- 二四 あすは 代數 地理 及 文法の 試験 あり。
- 二五 誰か 最 よき 成績を 得たる。

第五章 句

文の成分を備ふれども獨立せざるものあり

主 人の 住む 家 あり。
 主 風 吹けば 花 散る。

主 鳥 鳴き 花 咲く。

右の 人の 住む 風吹けば 鳥鳴きは、共に主語・敘述語を備へたれども、其の意義完結せざれば、なほ文の一部たり。此等を句といふ。

○形容句

主 人の 少き 家は 寂し。

主 花の 咲きたる 枝を 折りたり。

主 彼は 余が よく 知れる 人なり。

主 君は 余が 嘗て 教を受けし 先生を 知れりや。

主 君が 住める 家の 主人 今 来たり。
形容句 主 修 主 修 主 修
 主 火の なき 處には 煙も 立たず。
形容句 主 客 主 主 主
 主 我が 愛讀する 書は 漢の 司馬遷が 著せる
形容句 主 主 主 形容句 主 主
 史記なり。

右の如く名詞(代名詞)に係るものを形容句といふ。

○副詞句

主 風 吹けば 花 散る。
副詞句 主 主 主
 主 水 清ければ 大魚 すまず。
副詞句 主 主 主
 主 君 せば われも 行かむ。
副詞句 主 主 主

副詞句 假令 人數は 少くとも 勢は 強からむ。
副詞句 主 主 主
 主 余は 假令 如何に 雨 降るとも あすは 出發
主 修 主 主 主

副詞句 彼が 勉強する 如く 勉強せば 誰か 上達せざ
副詞句 形容句 主 主 主
 副詞句 人々が 驚く ほど 畫が 美しく 出来たり。
副詞句 形容句 主 主 主

右の如く、動詞・形容詞等に係るものを副詞句といふ。形容句・副詞句は修飾成分なれば、總稱しては修飾句といふ。

○主句 客句

形容句は、其の係る名詞を省きて、主語客語の用をなすこと

あり。之を主句。客句といひ、又名詞句と總稱す。

軍の主句 敗る、(事は) 大将の 罪なり。

猫の主句 鼠を 捕ふる (働は) 甚 機敏なり。

誰か 國の 榮ゆる (事を) 喜ばざる。

吾 小兒の 畫を 描ける (サマ)を 見たり。

余は 夏日の 長き (コト)を 愛す。

○叙述句

朝は ころち よし。

彼は 操行 善良なり。

右の如く叙述語の用をなすものを叙述句といふ。

○中止句

鳥 鳴き 花 さく。

東京は 人口 最多し。

牛乳は 滋養分 鶏卵に 優れりや。

大阪は 煤煙 常に 空を 掩へり。

厳島の 景色 たとふべき もの なし。

大魚の 住まざるは 水 清ければなり。

主 櫻は 中止句 多く 主 梅は 主 少し。
 主 兄は 中止句 客 薪を 主 拾ひ 主 弟は 主 水を 客 汲む。
 主 月 中止句 主 明に 主 星 中止句 主 稀に 主 烏鵲 客 南に 客 とぶ。
 主 山 中止句 主 高くして 主 水 主 清し。
 主 兄のみ 中止句 主 よく 主 勉強して 主 弟は 主 常に 主 遊べり。
 主 東京は 中止句 主 日本の 主 首府にして 主 横濱は 主 有数の 主 良
 港なり。

右の如く、他の部分に並立して中止するものを中止句とい

ふ。

〔練習〕

左の文の成分及句の種類をいへ。

- 一 花 なき 里にも 鳥 なけり。
- 二 君が 訪ふ 人は 誰ぞ。
- 三 家 ある 處 なし。
- 四 誰か 君が いふ 事を 行はむ。
- 五 山 高ければ 月の 出づる 事 遅し。
- 六 あるじ なき 宿にも 花は 咲くべし。
- 七 君 去らば 誰と 共にか われは 遊ばむ。
- 八 東風 吹かば にほひおこせよ 梅の花。
- 九 吾 亦 君が 尋ぬる 人を 尋ねむ。
- 一〇 月 落ち 烏 啼き 霜 天に 満つ。
- 一一 かしこの 家は われ等が 嘗 住ひし 家なり。
- 一二 かれが 上達せむ 事を 吾は 祈れり。

- 一三 彼の 家は 借る 人 なし。
- 一四 龍の 走るが ごとく 汽車は 走れり。
- 一五 かれは 富みたれども 其の 富や 恰 水の 泡に 似たり。
- 一六 生命の つゞかむ 限 我は 活動せむ。
- 一七 彼は 財こそ なけれども 其の 器量は 決して 平凡な
らず。
- 一八 人 皆 進みて 吾のみ 進まず。
- 一九 風 蕭々として 易水 寒し。
- 二〇 山の 高さが 如く 木も 深し。
- 二一 かれは 如何なれば 其の 體 よわりたるか。
- 二二 君よ 余が 勉強する 丈 勉強せよ。
- 二三 運動は 我等 一日も 之を 怠るべからず。
- 二四 君 寝ねば 暫し 君が 持てる その 書を かし給へ。
- 二五 白露 江に 横り 水光 天に 接す。

第六章 小句

いと 美しき 花主 さく敘。
 余は 昨日 面白く 囀る 鳥を客 買ひたり敘。
 彼は いと よく 話す敘。
 子を 持ちて 親の 恩を客 知る敘。

右の いと 美しき 面白く 囀る いと よく 子を
 持ちて のごとく、語が重りて句を成さざるものを小句
 又は未成句といふ。

○形容小句

形容小句 いと 美しき 花主 さけり敘。
 形容小句 わが 宿の 櫻も主 咲き揃ひたり敘。

櫻形容小句の 花客の 盛主に 吾客は 友客を 會客せむ。

右は修飾語が相重りて、名詞(又は代名詞)に係りたるなり。

山形容小句に 登主る 人客多客し。

魚形容小句を 釣主る 者客甚客少客し。

親形容小句に 孝客を 盡客す 人客は 君客に 忠客を 盡客す。

吾主未修 その 子客を にくむ 親客を 見客ず。

雪形容小句よりも 白主き 色客なからむ。

孔子形容小句より 賢主き 人客も 亦修 生客るべし。

右は客語を備へたる動詞・形容詞が名詞(又は代名詞)に係るものなり。かく名詞に係るものを形容小句といふ。

○形容小句は、其の係る名詞が省かれたる爲、主語客語の用をなすことあり。之を主小句・客小句といひ、又名詞小句と

も總稱す。

書主小句を 讀主む(事)は 樂客し。

これよりも 短客き (モノ)は 用客を な客さず。

誰主か 山客小句に 遊客ぶ (事)を 欲客せざる。

君主よ 此客小句れよりも 大客なる (モノ)を 求客め給へ。

○副詞小句

花主いと 美主しく さ客く。

か修の 馬主 甚副詞小句 速主に 走客る。

急副詞小句ぎて 行主かば 行修きつかぬ 事主や 有客るべき。

右は、修飾語が重りて動詞・形容詞等に係りたるなり。

月副詞小句に 對主して 誰客か 古客人を 忍客ばざらむ。

多副詞小句く 書主を よまば 上修達すべき 事主 確客なり。

如何副詞小句に 書を よむとも 副詞小句よく 其の 意を 考へ
 ずば 修了解せむ 事主難敍かるべし。

右は、客語を備へたる動詞が動詞・形容詞等に係りたるなり。
 此の外、副詞小句は種類多し。

右の 通 相違 これ 無く候。

汝は 如何なる 目的を 以て さる 事を せる。

余は 東京に 於いて 生れたり。

そは 君に とりて よき 試金石なり。

余は 友人の 身の上 就いて 心配せり。

明日は 日曜日に つき 休業なり。

修業せむ 爲に 上京せり。

親しき 友と 遊ぶ 位 愉快なる 事 なし。

○他の語句・文が文中に挿入引用せらるゝことあり。多くは客語の用をなす。

誰か いふ 「君王の 行路 難し」と。

義朝 之を 見て 「悪源太は ゐぬか。信頼と

ふ 大臆病人が 待賢門をば はや 破られつるぞ

や。あの 敵 追ひ出せ」と 宣ひければ 「承り候」と

て 駈けられけり。

第七章 文の組織

文は、組織上より單文・複文・重文に分つことを得。

○單文

花主 咲敍く。

右は一個づゝの成分ある文なり。

吾^主 山^客に 登^敘る。

小兒^主 書^客を よむ^敘。

農夫^主 正^修しく 稲^客を 植^敘う。

美^修しき 桜^主花 今^修 盛^修に 咲^敘けり。

よく 勉強^敘する 人^主は 將^修來 必^修 命^客名を 天^客下に

右は二個の同成分ある文なり。すべて主語と敘述語との

櫻^主も 梅^主も 美^敘し。

柿^主は 美^敘しく 且 甘^敘し。

彼^主は 筆^客と 紙^客とを 持^敘てり。

柿^主は 美^敘しく 且 甘^修き 菓^敘實なり。

櫻^主も 梅^主も 美^敘し。

柿^主は 美^敘しく 且 甘^修き 菓^敘實なり。

彼^主は 筆^客と 紙^客とを 持^敘てり。

柿^主は 美^敘しく 且 甘^修き 菓^敘實なり。

關係の單一なるもの、即句を含まざるものを單文といふ。

尙、左に單文の例を示さむ。

桃^主 櫻^主 梨^主 海棠^主 皆^修 咲^敘きたり。

かれは 歌^敘ひ 且 舞^敘へり。

吉野の 櫻^主も 月瀬の 梅^主も 共^修に 有^敘名なり。

徳は 禽^客 獸^客 虫^客 魚^客に 及^敘べり。

東洋の 獨^主立國は 日本 清^敘 及 暹羅等なり。

孔雀は 美^修しく おとなしく けだかき 鳥^敘なり。

彼は 牛^{副小}の ごとく 多く 飲^敘み 馬^{副小}の ごとく

多く 食^敘ふ。

吾^主 吉野に 遊^敘び 又 月瀬を 訪^敘ひ 而して

有名なる 櫻^客と 梅^客とを 賞^敘せむ。

○複文

われ 主 動物園に 副詞小句 行きて 最 勇猛なる 形容小句 虎 客 最 形容小句
 美麗なる 客 孔雀 又 他 修 の 珍禽 客 奇獸 客 を 見 たり。

余 主 は 君 形容小句 が よみたる 書 を よむ 彼。

人の 形容小句 多き 主 場所 主 は 騒 彼 し。

五郎 形容小句 が 住める 主 家は 山中 客 に あり 彼。

かれ 主語 は 人 形容小句 げ なき 山 に すめり 彼。

炎熱 形容小句 烈しき 主 夏 主 は 古木 形容小句 鬱葱 主 たる 深山 修 の 中 客

を おと づれず 彼。

右は形容句を含みたる文なり。

君 副詞小句 行かば 吾 主 も 行かむ 彼。

かれ 主 は 余 副詞小句 が いふまゝ に はたらく 彼。

水 副詞小句 清ければ 大魚 主 すま 彼 ず。
 月 副詞小句 出づれば 星 主 見え 彼 ず。
 人が 副詞小句 悪口 主 する ほど 彼は 主 あし 彼 から ず。
 君 主 よ 雨 副詞小句 は 降るとも 風 副詞小句 さへ 吹かず ば 是非 修
 來給へ 彼。

右は副詞句を含みたる文なり。

月の 主 出づる 甚 修 遅 彼 し。
 人の 主 住めるは かの 修 島 彼 なり。
 輸入 主 の 輸出 主 に 超過 主 する 少 彼 から ず
 余 主 が 初 主 めて この 學校 主 に 入 主 りしは 一 修 昨 主 年の
 四月 主 なり 彼。
 汝 主 は 燕 客 の 子 主 を 育 主 つるを 見 彼 たるか。

吾人は 人の 己を 知らざるを 患へず。
 汝 越人の 汝が 父を 殺しゝを 忘れたるか

右は主句・客句を含みたる文なり。

この 畫 趣 あり。

事は 始ぞ 大事なる。

澄み渡る 秋の 空こそ 眺望 快潤なれ。

京都は 山水の 美 天下に 冠たり。

忠孝の 道は 我が 國 萬國に 秀でたり。

右は敘述句を含みたる文なり。

東の 山 高ければ 月の 出づる 事 遅し。

木の葉の 落つる 聲 雨の 降る ごとく 聞ゆ。

余は 雪 ふるごとに 赤穂義士が 吉良義央の

首を 討ち取りし 當時を 追想す。

形の 大なるは 質 あしけれども 價 貴し。

金剛石も 工師 之を 磨かずば 玉の 光は 出

でざらむ。

雪 降りつもれる 冬の 朝の 眺こそ 春の 花

の 盛なるにも 優りて 比ふべき ものも なく

いと 興 あれ。

右は形容句・副詞句・主句・客句等を含みたる文なり。此の如く句を含みたるものを複文といふ。

○重文

鳥 鳴き 花 落つ。

白露 江に 横り 水光 天に 接す。

兄は中止句 士官候補生と なり 弟は主 兵學校に客 入學彼す。

山中止句 高く 水主 清し彼。

月中止句 明に 星中止句 稀に 烏鶻主 南に客 とぶ彼。

硝煙中止句 空を 掩ひて 砲聲主 山岳に客 轟く彼。

論のみ 多くして 事主 運ばず彼。

右は中止句を含みたる文なり。かく中止句を含みたるものを重文といふ。

語句小句及文の組織に種類ある事は既に述べたるが、尙左の文につき再之を指摘せむ。

余が修 友主 遠く修 北京より 余に客 よほど形容小句 珍しき 畫を客 わざく修 送れり (單文)

よく形容小句 泳ぐ主 者主 却つて修 水に客 おぼる彼。(單文)

我主 舟筏を副詞小句 僦うて 筑水を客 下る彼。(單文)

(余主 君をこそ客 朝日と客 たのため彼。(單文)

(君主 故郷に形容小句 残る客 なてしこ客 霜に客 からすな彼。(單文)

吾は主 山に副詞小句 行きて 薪を客 拾ひ彼 川に副詞小句 行きて彼

魚を客 漁り彼 而して 日々に修 家業を客 助く彼。(單文)

君が形容小句 植ゑし主 松ばかりこそ 残りけれ彼。(複文)

君が形容小句 買へる主 本は 余が形容小句 持ちたりし主 本なり彼。

(複文)

雨さへ副詞句 降らずば 風は副詞句 ふくとも 吾主 行かむ彼。

(複文)

山 副詞句 高ければ 形容句 月の 形容句 出づる 主 事 主 遅し。 主 (複文)

花 中止句 さき 形容句 鳥 形容句 なく 主 春の 修 景色 主 こそ 主 面白けれ。 主

(複文) 中止句は形容句に並立せり。

雨 中止句 降り 副詞句 風 副詞句 ふかば 主 吾 主 行くまじ。 主 (複文) 中止句

は副詞句に並立せり。

鼻 中止句 尖り 中止句 眼 中止句 碧に 主 毛髪の 主 赤きは 主 洋人なり。 主

(複文)

誰か 主 鳥の 中止句 面白く 主 噂り 主 魚の 客句 楽しく 主 遊ぶを 主

喜ばざる。 主 (複文)

京都は 主 市街 中止句 正しく 主 山水 中止句 明媚にして 主 神社 叙述句

佛閣 主 甚 主 多し。 主 (複文) 以上三文中の中止句もそれく主句

客句叙述句に並立せり。

(吾) 副詞句 天の原 主 ぶりさけみれば 主 (アレハ) 形容小句 三笠の山に

出でし 主 月かも。 主 (複文)

東風 副詞句 吹かば 主 にほひおこせよ 主 梅の花。 主 (複文)

(梅の花) 『あるじ 主 なし』とて 修 春 主 な忘れそ。 主 (單文)

他の文を挿入したり。

衣は 中止句 肝に 主 至り 主 袖 客 腕に 主 至る。 主 (重文)

君が 中止句 ゆく 形容句 学校は 主 遠く 形容句 余が 主 通ふ 形容句 学校は 主

近し。 主 (重文) 中止句に形容句を含みたり。

春 中止句 くれれば 副詞句 日 副詞句 暖に 主 秋 副詞句 たてば 主 風 主 寒し。 主 (重

文) 中止句に副詞句を含みたり。

〔練習〕

左の文に就き、語句小句及文の組織をいへ。

- 一 吾 君が 教へし 通 いひたり。
- 二 人が 追ひつき得ぬ ほど 急いで 彼は 行きたり。
- 三 本日 吾々 同志 某處に 集會任り候 間 御繰り合せ 貴君も 是非 御來會 下され度候
- 四 弱さ 人は 益 勉強し 強さ 人は 愈 運動す。
- 五 命を 全うして 君の 御用にも 立ち 父の 素志をも 達せむ 事こそ 忠臣 孝子の 義なれ。
- 六 峯 高くして 路 細く 山 峻にして 苔 滑なり。
- 七 阿新は 竹林の 中に 隠れながら 今は 何處へか 遁るべき 人手に かゝらむよりは 自害を せばやと 思はれけり。
- 八 某の 遠征隊は 敵の 抵抗 なく 今日 目的地に 達し 其の 同胞を 水火の 中より 救ひ出したり。
- 九 吾人は 早晚 人種の 大衝突 ある 事を 覺悟せざるべからず。
- 一〇 朝鮮の 釜山は 人口 既に 數萬に 達し 旅客 貨物の 往來 益 頻繁にして 貿易の 隆盛なる 事 仁川に 勝

- 一 最高等の 動物たる 人類は 腕力も 甚 強からず 角も なく 鋭き 牙も なく 周圍の 物に まぎらはしき 色も なく 自衛の 具 甚 少し。
- 二 石炭は 多く 九州に 産出すれば 石炭に 大關係を 有する 工業は 將來 必 この 地方に 發達せむ。
- 三 農業は わが 國の 重なる 事業なれども 土地 狭少な る わが 國は 將來 商工業の 發達を 圖らざるべからず。
- 四 輸入 常に 輸出に 超過せば 正金 年々 外國に 流出して 我が 國の 經濟は 終に 救ふべからざる 困難に 陥るべし。
- 五 兵 如何に 整ふとも 商業 振はず 工業 興らずば その 國は 恰 生氣 なき 枯木の 如くなるべし。
- 六 支那人は 牡丹の 福々しくして 品格の 高さを 愛し 西洋人は 薔薇の 色 濃くして かをり 高さを 喜び 我が 國人は 櫻の 鮮に 潔さを 好む。

- 一七 秋風は 吹きなやぶりそ わが 宿の あばら かくせる
蜘蛛の すがきを。
- 一八 こゝろ あらむ 人に みせばや 津の國の なにはわたり
の 春の 景色を。
- 一九 みやまぎの その 木ずゑとも 見えざりし 櫻は 花に
あらはれにけり。
- 二〇 ふるさ 都を きて 見れば 浅茅が原とぞ なりにける
月の 光は くま なくて 秋風のみぞ 身には しむ。

第八章 文體及文の結

文は性質上より平敘體・疑問體・命令體・感動體に分つことを得。

○平敘體

花 咲く。

月 いと 清し。

人は 萬物の 靈なり。

吾等も 亦 一日の 壯遊を 試みむ。

○平敘體の想像は、對話の場合に、問ひ懸くる意となることあり。

君は 長男ならむ、舉動 大様なり。

此の 文は 君 一人の 作に あるまじ、平生よ

りは あまり 優れたり。

○平敘體は動詞・形容詞・及助動辭の第三段を以て結ぶ。但助辭ぞなんこそ、の係ある場合には、其の結を第四段・第五段に變ずること既に説けるが如し。

勉強は 幸福の 基。

待たるゝ 者は 鶯の 聲

右の如く、同格名詞を以て文を結べるものは、其の下に指定の助動辭の省かれたるなり。

○年始の 祝詞まで かくなん。

此の 大臣 本性 悪しく おはしけりとぞ。

清盛 一家 非分の 業 天意に 背きけるにこそ。

右の如く、ぞなんこそを以て結べるものは、其の下に敘述語の動詞が省かれたるなり。

○かくなん 思ひて 行きけり。

後宇多の 御門こそ ゆゝしき 稽古の 君に ま

しましゝに (後醍醐) 其の 御跡をば よく 繼ぎ

申させ給へり。

難波津を 今日こそ みつの 浦ごとに これや

この 世を うみ 渡る 舟。

右の如く、なんこそ等の係る詞の終止すべきにあらざる場合は、固より之を結ぶこと能はず。

○疑問體

○人が あるか。

それは 信なりや。

彼は 誰なるぞ。

何處にか 行きたる。

春や 來る。

○疑問體は反語となり、又誘引となることあり。

誰か 謂ふ 黄人 白人に 劣ると。

東洋 豈 豪傑 無からむや。

火 なきに 烟 あるべきか。

金錢のみ 貴き ものかは。

我 不肖なりとも などは 彼に 屈せむ。

上野公園に 行き給はずや。

御出下さるまじく候や。

○疑問體は助辭や、か又は、ぞを以て結ぶ。又や、かが係となる場合には第四段にて結ぶこと、既にいへるが如し。

打ち出づる 浪や 春の 初花。

「水や」 空 空や 水と 疑はる。

試験は 既に 濟みたりとか。

彼が 首席を 占めしは 勉強の 結果にや。

右の如く、疑問體に於いても、結の省略せらるゝことあり。

○命令體

皆 こゝに すわれ。

五時には 必 起きよ。

遅刻する こと なかれ。

悪しき 友とは 決して 遊ぶな。

○命令體は放擲の意となることあり。

思ひ入る 道に 此の 身は 捨小舟 風 吹かば

吹け 波 立たば 立て。

御身 我が 言を 用ゐ給はずば 意の 儘に ぶ

るまひ給へ 我は 後來 物をも 申すまじ。

○命令體は、動詞・形容詞・助動辭の命令法、又は此等に附屬す

るテニナハよ_レやか_レし等を以て結ぶ。

○感動體

彼も亦人傑なるかな。

三笠の山に出でし月かも。

あな恐しの人や。

彼こそあつばれ大將よ。

花の色は移りにけりな。

感動體は、通常、感動のテニナハを以て結ぶ。

〔練習〕

左の文に就きて係結を指示し、且誤りたるは正せ。

- 一 己を責めてこそ徳にも進まめ。
- 二 長く交りてぞ人の性質は知らるべし。
- 三 御身の爲を思へばこそかく忠告をするなるに誠の

通らざるはうらめしけれ。

四 財多きこそ人は善けれど不義の富は卑むべし。

五 碌々としてや此の世にあるべしと奮ひ立つべき。

六 花は蕾なる程なん見るには善きと云ふ人もある。

七 兼好法師は月は隈なきをのみ見るものかはと云へる

理ある言なり。

八 今度の試験には我なん一番とは考ふれど如何ある

べき心もとなし。

九 古の人は係結をこそ日本文法の第一義とせしかど

さる難きわざにはあらざりけれ。

一〇 日本人にして日本の文法を知らざる人は耻なりと思はぬにや國語の貴きことを知らざるにや慨かしき事なり。

第九章 敬語

母君 若君を 抱きて 御庭に 出でさせ給ふ。
貴家 皆様 御障も 入らせられず候や。

小生 明日 參上致すべく候。

私が 御知らせ申ませう。

此の 御帽子は あなた様ので ございますか。

手紙が 参りました。

雨が 降ります。

右は何れも敬語なるが、主體を尊敬せるあり、卑下せるあり、所有物動作を尊敬し或は卑下せるあり、一般に聽者を敬ひて言葉を丁寧にするもあり。今此等の敬語を大別して尊他・自卑對話の三種とす。

○尊他敬語 他の主體所有動作状態を尊敬するもの。

某宮殿下 昨日 御歸朝あらせらる。

あなたの 御宅は 御立派です。

右の 宮殿下 あなたは主體を敬ひ、御宅は所有を、御歸朝あらせらるは動作を、御立派ですは状態を敬へるものなり。

○自卑敬語 自己の主體所有動作を卑下するもの。

僕の方から 御案内を 致しませう。

愚兄は 本年 命を 奉じて 某地を 視察せり。

右の僕は主體を卑下し、愚兄御案内は所有を致し奉じは動作を卑下せり。

○對話敬語 聽者を尊敬する一般的のもの。

今日は 好い お天氣で ございます。

貴君も 御出なされ候や 小生も 参り候。

右の お天氣 ござい ます 候 参り は、自他尊卑の別あるにあらず、唯對する聽者を敬ひて言葉を丁寧にするなり。此の敬語は、稍新しきものにて、尊他或は自卑より轉じ來れるものなり。

三種の敬語の中にて最注意べきは、接頭語 み おん お ござよ の用法なり。此は所有を敬ふ者なるに、主體を敬ふ時に、「お釋迦さま」とか「私のお師匠さま」などいふは俗の濫用なり。自己の動作所有に添ふるは、其の物、其の事の他に關係する場合に限る。對話敬語に用うるは、婦人小兒などの用語より廣まれるなり。

〔練習〕

左の文中に於ける敬語を指し、其の種類をいへ。

- 一 私 は 少しも 存じ申さず候。
- 二 御存じに 候はゞ 御教を たまはりたく候。
- 三 高堂 御尊父様には 如何 遊ばされ候や。
- 四 旦那様は 明日 御参宮に 御出發です。
- 五 手前も 御伴を 仰せ付けられました。
- 六 御氣の毒に 存じ奉る。
- 七 御秘藏の 御書籍 拜借仕り 御蔭にて 通讀致し候 段 有りがたく 御禮 申し上げます候。
- 八 母上が 父上に 帽子を 御渡しなさる。
- 九 私 は 昨年 朝鮮に 参りました。
- 一〇 さう いふ 譯には 参りません。
- 一一 倅が 御世話に 相成り候 御禮の 印まで 粗品 呈上仕り候。
- 一二 急ぎ 上京あれ。
- 一三 先生が 某公子を 教へまゐらせられし 折の 御苦心談

- 承りたく 御伺 申し上げ候。
- 一四 朝廷より 罷り出づ。
- 一五 無事 消光 罷り在り候。
- 一六 拙者より 罷り出で候 儀は 差し控へ申し候。
- 一七 先達 御尋致しました 事は まだ 御まらべ下さいませ
いか。
- 一八 人の 食物は 申さば 汽關の 石炭で ある。
- 一九 お客様に お茶を 差し上げる。
- 二〇 諫を 納れ奉る 忠臣をば 常に 召し上げて 左右に 侍
はせさせ給ふ。

第十章 中古の助辭

○過去完了

「われ 落ちにき」と 人に 語るな。

垂れこめて 春の 行方も 知らぬ まに 待ちし
 櫻も うつろひにけり。
 み吉野の 山の 白雪 ふみ分けて 入りにし 人
 の おとづれも せぬ。

右の落ちにきうつろひにけり入りにしは、完了せる動作の過去にありしを表せるものにて、之を過去完了といふ。「時」の意義は過去と異なることなし。過去完了は完了辭に過去辭を添へて之を表す。口語のテシマッタタッタケなど之に當れど、完了を略して尋常の過去のタを當つべき場合も多し。

雨 降
 りりりりて
 れりたり
 けき
 けり

右八種の中にて、たりきは今の文にも常に用う。又たりきりけり は存在繼續などの過去の義にも用うることあり。口語 テアツタ テナツタ などなり。

○未來完了

春雨 明日さへ 降らば 若菜 摘みてむ。

大和心に なりぬべし。

足の 向きたらむ 方へ 往かむ。

右の摘みてむなりぬべし 向きたらむ は動作の未來に完了すべきを表せる者にて、之を未來完了といふ。「時」の意義は未來と異なることなし。未來完了は完了辭に未來の想像辭を添へて之を表す。口語には相當るものなく、テヤラウ テオカウ テキヨウ サウダなどに近く、又は想像を畧

してタといひ、又は完了を畧して單にウヨウとも言ふべきことあり。

花 咲 ^{きて} ^{きた} ^{きたら} ^む

咲 ^{きつ} ^{べし}

右六種の中にて、たらむは今の文にも用う。てむつべしは想像ともなり、たらむは今の文にも用う。てむつべしは可能の意を加へてテヨイラレヨウなど言ふべき場合もあり。たりりにべしを添へたる形は、現在の想像のみにて、未來の義となることなし。

○希望 なむ もが しが

今 一たびの みゆき 待たなむ。

山の 端 にげて 入れずも あらなむ。

老いず 死なずの 薬もが。

世の 中は 常にもがもな。

○ 春さやうの 事は あらずもがな。

思ふどち 春の 山べに うち群れて そことも

いはぬ 旅寝してしが。

右の なむ は、第一段に附きて、他のまかあらむことを希望するものにて、之をアツラへ(詠)ともいふ。口語 バヨイテ ホシイなどに近し。もがは名詞副詞に添ひて同じく詠の意を表し、しがは動詞の第二段又は第二段にてにを添へたるものに附きて、自己の上につけて希望すること、たしに近し。

○ 想像 らむ らし めり まし

○ らむ

ふるさとに 今宵かぎりの 命とも 知らてや 人

の 我を 待つらむ。

○ 静心なく 花の 散るらむ。

右の 待つらむ 散るらむ は、現在「待つ」「散る」ことを、或は目撃せず或は目撃しつゝも其の原因状態を静心なくなど想ひやれるものにて、之を現在想像といふ。口語にては當る語なく「待ッテキルダラウ」「散ルノデアラウ」など解す。未來想像に用うることなし。所屬はべしに同じく、活用法はむに同じ。

○ らし
立田川 もみぢ葉 流る 神南備 の 御室の 山

に 時雨 ふるらし。

右は現在想像の義は「らむ」と同じけれど、更に立田川もみぢ葉流るといふ如き根據ある時に用う。所屬は「らむ」に同じ。中古文には活用なく、今はシク活に用う。

雨 ふるらしく らし らしき らしけれ

又名詞に附きて形容詞を造ることあり。

男らしき 舉動。 女らしく 見ゆ。

此等は接尾語なり。

〇めり

立田川 紅葉 亂れて 流るめり 渡らば 錦 中
や 絶えなむ。

物の あはれは 秋こそ まされと 人ごとに い

ふめれど 今 一きは 心も 浮き立つ ものは

春の けしきにこそ あんめれ。

右は「べし」に近く、斷定すべき事の語氣を和げて軽く想像するものなり。されば今人の耳には「なり」と指定せるものと聞きて、事實は誤らず。口語に「様ダ」「様子ダ」など強ひて當つれど、今は無き言葉なり。所屬は「らむ」に同じく、活用・法は「けり」に同じ。

〇まし

大方 保元以來の みだりがましきに 頼朝と い
ふ 人も なく 泰時と いふ 者も なからまし
かば 此の 日本國の 人民 いかゞ なりなまし
右は「頼朝泰時アリシ」故ニ人民塗炭ノ苦ヲ免レタリシ事實

につきて、其の反對なることを假設して想像せる者なり。
むべし、などは、皆事實なること或は事實なるべきことを
想像するに、此はその裏をいふ處を特徴とす。かゝる場合
に、今の文にては、

○ 無かりしならば……なりしならむ。

無くば……ならむ (なるべき)。

無かりせば……なりたらむ。

無からしめば……ならむ。

など言ふ中に、せばはましかばと畧同じ。「ば……むは
ほよその言方にて、事實なるべきをいふが本義なり。
うれしきを 何に 包まむ 唐衣 たもと ゆたか
に 裁てと いはましを。

此も「袂ニ包ミキレヌ此ノ嬉シサアラント思ハザリシ故ニ、
豊ニタテト言ハザリシ。事實につきて、豊ニタテト言ハバヨ
カッタニ」と悔みて、其の反對なることを假設して想像せる
なり。之を反實假設想像といふ。

かくと 知らましかば(知りせば) 歸路を 急がまし。

(知ラズシテ急ガザリキ)

形見をば 留め置かまし。(留メテ置ケバヨカッタ)

思ふ こと なくてぞ 見まし。(物思アレバ山水ノ美ヲ

見テモ心ヲ慰ムルコト能ハズ)

来て 見ずば くやしからまし。(來テヨカッタ)

ましは第一段に附く。活用は、

来	見	思	見
来	見	思	見
来	見	思	見
来	見	思	見

のどけから 思はざら	第三段	第四段	第五段
まし	まし	まし	ましか

此の第五段には「バ」のみ添ひて「ド」の添ふことなきは、
と相反す。

中等文法教本下終

附録 文法上許容すべき事項

教科書ノ檢定又ハ編纂ニ關シ文法上許容スベキ事項ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二 「シク」「シシキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

- 四 「コトナリ」「異ラ」「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ
- 五 「セ」「セサス」「下イフ」ベキ場合ニ「セラ」「略スル」習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サヌ

周旋サス
賣買サス

六 「トイフベキ場合ニ、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ
從フモ妨ナシ

例

罪サル

評サル

解釋サル

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例

二 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

一 上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ズルコトヲ得セシムベシ

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」

「ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

九 てにをは「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

十三 市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十 疑ノてにをは「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一 てにをは「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ
強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二 てにをは「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連
體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ

嘲弄セラル「ト」思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ

十三 語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをは「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキ
ニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳①ヲ讀ムベシ

十四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五 てにをは「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用

キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

十六 誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ
 十六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ
 妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ
 顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ徳川時代國學者ノ
 研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依
 リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナ
 ラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其
 用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬
 ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ之ヲ許容シテ在來
 ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セ
 シニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教

科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス(明治三十八年十二月二日
 文部省告示第百五十八號)

(附錄終)

明治四十五年一月廿九日
文部省檢定濟

發行所

東京市神田區錦町二丁目
振替貯金口座東京四九九二番

明治書院

(電話長本局二四三八番)



明治四十四年十一月十日印刷
明治四十四年十一月十三日發行
明治四十五年一月二十日訂正印刷
明治四十五年一月廿五日訂正發行

中等文法教本
定價 上卷金貳拾五錢
下卷金貳拾貳錢

著者 三矢重松

著者 清水平一郎

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 三樹一平

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三秀舍

附錄

廣島中學校
第四學年只教場

八

Handwritten signatures and notes at the bottom of the left page.

